

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25293472

研究課題名(和文) 子どもと家族主体の在宅ケアを支えるケアモデル開発と実践推進システムの考案

研究課題名(英文) Development of a care model and a system to support and improve the child-and-family-based care in home medical care for child

研究代表者

奈良間 美保 (Narama, Miho)

名古屋大学・医学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：40207923

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、小児在宅ケアにおける子どもと家族主体のケアモデルを生成し、実践活用システムを考案することである。ケアモデル実践活用システムの開発として、子どもと家族主体の看護を共有する事例検討会(以下、事例検討会)に参加した14名の看護師を対象に、半構造化面接を実施した。看護師は、事例検討会に参加することで、他者の体験や会場内の質疑応答を聴き、対象者自身が自分の中で何かに気づく体験をしていた。そして、事例検討会に参加することは、対象者にとって、「源だったり原点に戻る」ことであり、それぞれの臨床の場に戻って『子どもと家族を主体としたケア』に取り組むための意欲につながることを示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop a care model and a system to support and improve the child-and-family-based care in home medical care for child. In-depth semi-structured interviews were conducted for 14 nurses who had participated in the case conferences focused on Child and Family- Based Care (the case conference). At the case conferences, nurses recognized their own awareness when they heard other nurses' opinions, thought and experiences through the discussion between the presenter and the audience including themselves. For nurses, moreover, to participate in the case conferences was opportunities that they could think back their daily nursing care and focus on their original concepts of nursing. This study suggested that the participations in the case conferences focused on Child and Family- Based Care had provide the nurses with the opportunities to reflect their daily experiences and feel their own awareness about the perspective for nursing.

研究分野：小児看護学

キーワード：在宅ケア 相互作用 事例検討 ケアモデル 家族

## 1. 研究開始当初の背景

(1)小児在宅医療の現況：近年、在宅医療が急速に拡大する中で、人工呼吸管理、経管栄養法などの医療技術を要するケアを要する子どもは増加し、退院後の子どもや家族の心身の負担は増大している。

(2)子どもと親の相互作用に着目した支援：子どもは養育者との相互作用を繰り返しながら成長発達を遂げていく。しかし、研究者らが取り組んだ研究では、小児の在宅移行期に関わった経験のある病院の看護師の 37.7%が「子どもは私のことを分かっていると親が思っているか」という親子の相互作用に意識が向いていないことが明らかになった(奈良間, 2011)。医療面だけでなく、親が子どもに対して抱く気持ちをありのまま受けとめて、発達支援の視点から在宅ケアの基盤となる親子関係を総合的に支える方法を科学的に解明、推進することが急務と考えた。

(3)事例検討会の取り組み：研究者ら 2008 年から「子どもと家族を主体とした看護を共有する事例検討会 (Patient & Family-Centered Care 勉強会：以下、事例検討会) を開催してきた。そこでは、事例を提示する看護師から子どもや家族、さらには他の看護師や医師などとの関わりを通して感じたことや看護実践が語られる。さらに、参加した看護師の間でも、他者の体験を追体験することで生じる倫理的揺らぎ、実践での直感や想像、看護師自身の心の揺れ、社会とのつながりなど、看護学の知のパターン (Chinn & Kramer, 2011) にも通じる内容が語られていた。看護師が自身の看護実践を語るためには、それぞれの看護師が自身の看護実践を振り返ることとなり、その過程においては、自己に対する意味付けや看護実践の意味を明らかにする過程、すなわち、リフレクションが存在する (東, 2009 : p28)。東 (2009) は、

リフレクションの体験を語る場、すなわち事例検討を共有する場の存在が重要であると述べており、自身のリフレクションを伝え、また、他の看護師との相互作用の中で、さらにリフレクションが促進される可能性も指摘されている (前久保, 上野, 和泉, 2011)。しかし、事例検討やリフレクションの看護師自身の体験の客観視や自己の気づきと気持ちの変化について明らかにした研究はあるが、事例検討の場で生じていることについて研究的に取り組んだものは認められず、看護の知を共有する方策として検討する意義は大きいと考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的を以下に示す。

- (1) 小児在宅ケアにおいて子どもと家族が主体となる体験について、看護師と家族の視点から明らかにし、子どもと家族主体のケアモデルを生成する。
- (2) 子ども家族主体のケアモデルに関する事例検討会を開催し、ケアモデルの実践活用システムを考案する。

## 3. 研究の方法

(1) 医療的ケアを必要とする子どもの病院から家庭へ生活の場が移る時期の家族と看護師の認識に関する調査：小児在宅ケア継続中の子どもの家族と看護師 (訪問看護ステーション・病院勤務) を対象に、Patient & Family-Centered Care (以下、PFCC) の概念を参考に 2009 年～2013 年に実施した子どもと家族を主体としたケアに関する質問紙調査のデータ分析を詳細に進めた。

(2) 事例検討会の開催と参加した看護師の体験に関する調査：子どもと家族主体のケアに焦点を当てた事例検討会に参加した看護師に対して、参加したことで感じたこと、考えたこと、また、参加を継続する理由や参加し

たことで自身や周囲に生じたことに関してインタビューを実施、質的帰納的分析を行った。研究者が所属する大学の倫理審査委員会で承認を得た後、事例検討会終了後に調査協力の依頼を実施し、後日研究者宛に研究参加承諾書の返信を依頼した。

#### 4. 研究成果

(1) 小児在宅ケアにおける子どもと家族を主体としたケア：質問紙調査の分析結果では、看護師は子どもと家族主体のケアを大切と感じながらも実践しているという認識が低い項目が見いだされた。特に、チームや組織としての取り組みが求められるケアにおいて、実施されにくい現状が見いだされた。今後、家族の認識に関する分析結果との相違を明らかにして、子どもと家族主体のケアモデルを生成する計画である。

(2) 子どもと家族を主体とした事例検討会に参加した看護師の体験：事例検討会に参加した看護師を対象に、半構造化面接を実施した。対象となった看護師は、勉強会に参加することで、「意見や体験を聴いてはっと気づくことがある」など、他者の体験や会場内の質疑応答を聴き、対象者自身が何か気づく体験をしていた。そして、勉強会に参加することは、対象者にとって、「源や原点に戻る」ことであり、それぞれの実践の場に戻っても、『子どもと家族を主体としたケア』の実践に向けた意欲につながるが見いだされた。事例を題材に看護師の思考や思いを共有することは、対象や場が異なっても参加者に共有されやすく、ケアモデルの実践活用システムの構築につながるが示唆された。

#### <引用文献>

奈良間美保他、小児在宅ケア移行期における養育についての認識 看護師の捉え方とその関連要因、日本小児看護学会第21回学術集会講演集、2011、176。

Chinn P. & Kramer M. (2011). Integrated Theory and Knowledge Development in Nursing. 8<sup>th</sup> ed. pp1-23. ELSEVIER.

東めぐみ (2009). 看護リフレクション入門. p28. ラフサポート社. 前久保恵, 上野昌江, 和泉京子 (2011). 事例検討会に継続参加している在宅ケアに従事する看護職者の経験. 甲南女子大学紀要研究第5号 看護・リハビリテーション学編, 165-172.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

松岡真里、上原章江、茂本咲子、大須賀美智、花井文、橋本ゆかり、奈良間美保、『子どもと家族を主体としたケア』に関する看護師の認識の特徴 - 医療的ケアを必要とする子どもの在宅ケアを検討してから家庭で生活する時期に焦点を当てて -、日本小児看護学会誌、査読有、Vol.25、No.3、2016、24 - 31

奈良間美保、「看護の力」ここまでできる!“小児在宅ケア”をはじめよう、コミュニケーションケア、査読無、Vol.18、No.7、2016、10 - 14

上原章江、奈良間美保、大須賀美智、茂本咲子、松岡真里、花井文、橋本ゆかり、井上直美、川合弘恭、西村規予子、松浦衣莉、医療的ケアを必要としながら生活する子どもの家族の養育に対する看護師の認識 - 在宅ケアを検討してから家庭で生活する時期に関わった看護師と訪問看護師の調査より -、日本小児看護学会誌、査読有、Vol.25、No.1、2016、59 - 66

奈良間美保、入門講座、二分脊椎、就学・収録・二次障害まで 就学にまつわる問題点と対処、総合リハビリテーション、査読無、Vol.44、No.1、2016、41-45

奈良間美保、小児在宅ケアガイドライン、  
小児外科、査読無、44 巻、2015、900-904

奈良間美保、子どもと家族が主体となる  
在宅医療と看護 親であること、家族である  
こと、自分らしくあること、そのための在宅  
医療 小児在宅医療の視点から、小児看護、  
査読無、37 巻、2014、929 - 934

花井文、堀妙子、奈良間美保、子どもと  
家族が主体となる在宅医療と看護 家族や  
医療者が経験の語りをとおして感覚を共有  
する取り組み PaFaCC 勉強会、小児在宅ケア  
コーディネーター研修会における事例検討、  
小児看護、査読無 37 巻、2014、941 - 947

堀妙子、現代の子ども・家族の特徴と在  
宅医療、小児看護、査読無、37 巻 2014、916  
- 920

松岡真里、子ども・家屋と医療チームの  
協働、小児看護、査読無、37 巻 2014、935 -  
940

〔学会発表〕(計 3 件)

奈良間美保、医療依存度の高い子ども・  
家族への看護に求められるもの、第 46 回  
日本看護学会 - 在宅看護 - (招待講演)  
2105 年 10 月、名古屋市

大須賀美智、上原章江、松岡真里、茂本  
咲子、橋本ゆかり、花井文、山口大輔、  
井上直美、川合弘恭、西村規予子、松浦  
衣莉、大塚弘子、奈良間美保、在宅ケア  
を行いながら生活する子どもの家族が捉  
える養育 - 因子構造と関連要因、日本  
小児看護学会第 25 回学術集会、2015 年 7  
月、千葉市

上原章江、大須賀美智、松岡真里、茂本  
咲子、橋本ゆかり、花井文、山口大輔、  
井上直美、川合弘恭、西村規予子、松浦  
衣莉、大塚弘子、奈良間美保、在宅ケア  
移行期における家族の養育に対する看護  
師の認識 - 因子構造と関連要因、日本  
小児看護学会第 25 回学術集会、2015 年 7

月、千葉市

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.pafacc.com/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

奈良間 美保 (NARAMA, Miho)

名古屋大学・医学系研究科・教授

研究者番号：40207923

### (2) 研究分担者

松岡 真里 (MATSUOKA, Mari)

高知大学・教育研究部医療学系看護学部

門・准教授

研究者番号：30282461

(3) 研究分担者

堀 妙子 (HORI, Taeko)

京都橘大学・看護学部・教授

研究者番号：40303557

(4) 研究分担者

田中 千代 (TANAKA, Chiyo)

岐阜大学・医学部・准教授

研究者番号：20297188

(5) 研究分担者

大塚弘子 (OTSUKA, Hiroko)

名古屋大学・医学系研究科・助教

研究者番号：00434671

(6) 研究協力者

上原 章江 (UEHARA Akie)

(7) 研究協力者

大須賀 美智 (OSUGA Michi)

(8) 研究協力者

茂本 咲子 (SHIGEMOTO, Saki)

(11) 研究協力者

川合弘恭 (KAWAI, Kosuke)